軽トラ改造 EVに変身

墨田の業者が開発

GS過疎地でも気軽に乗って

ガソリンスタンドが少ない過疎地でも、気軽に軽トラック（軽トラ）を使えるよう、下町の工場が、荷台に電池を取り付けて電気自動車（EV）としても利用できる技術を開発した。家庭用のコンセントで充電でき、開発者は「給油が不便な地域に住む人にとってはいい選択肢になるのではないか」と話している。（鶴田裕介）

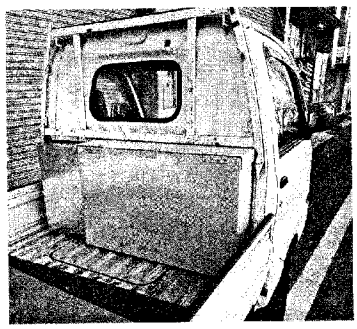
見た目は普通の軽トラとほとんど変わらないが、「近所なら電気だけでも大丈夫」と話す鈴木社長

ガソリンスタンドは、2011年の消防法改正で、設置40年以上の地下タンクには13年1月末までに交換や改修が義務付けられ、店側にとっては数百万円単位の新たな設備投資が必要になった。このため、零細を中心に廃業が進み、全国の店舗数は12年3月時点で3万7743店と、ピークだった1994年度末の6割程度に落ち込んでいる。経済産業省が定める、ガソリンスタンドが3店以下の自治体「給油所過疎地」は11年3月現在で238に達した。

ここに目を付けたのが、墨田区江東橋の自動車整備業「城東自動車工場」。

地方でよく使われる軽トラを、買い替えることなく、各家庭のコンセントから充電できる電気自動車に改良できれば、山間部などガソリンスタンドの少ない地域に住む人たちにも喜ばれるのでは、と考えたという。

改造軽トラは、荷台にバッテリーを、前輪と後輪の間にモーターを設置。家庭用のコンセントで8時間充電すると、約30キロ走ることができる。従来のガソリンエンジンはそのまま残るため、遠出する時はガソリンで走ることもできる。



改造された軽トラの荷台に取り付けられたバッテリー

2月に試作車が完成し、今夏にも、一般向け改造サービスを始める予定だ。

「農作業や近所使いでは電気を使い、遠出の時は今まで通りガソリンを使ってもらえばいい」と同社の鈴木啓一社長(58)。今のところ、改造費用は約150万円と少々高めだが、鈴木社長は「普及すれば価格を下げられるので、行政機関などでも導入を検討してもらえれば」と話している。